

～平成 29 年 4 月 15 日（土）におこなった寺社での調査結果（一部）を紹介～

幸手駅の近くにある神明社には、1923 年の関東地震が発生した 9 月 1 日の様子（地震発生前から発生直後まで）やこの付近の復興の過程が詳細に記されている石碑があります。碑文を読みとった結果、石碑の正面には、縦書きで次のように書かれていました（ / は改行を表します）。



神明社拝殿新築記念碑

回顧スレバ去ル大正十二年ハ春來気温例年ニ比シテ稍高ク時々蒸熱ヲ催ス九月一日ハ / 未明ヨリ南ノ風雨強烈ニシテ暴風雨ノ兆候ヲ呈セシガ午前十一時三十分頃ニ至リテ風 / 雨俄ニ歇ミ蒸熱殊ニ堪ヘ難ク暗雲低迷シテ何処（旧字体）トモナク陰慘ノ氣ニ充テリ全十一時五 / 十八分突如上下ノ震動ト共ニ大地震起リ瓦石飛ビ沙塵卷キ老若男女ノ叫ビ家屋倒潰ノ / 響キ騒然囂然到ル処（旧字体）忽焉トシテ阿鼻叫喚ノ巷ト化ス即チ全町戸數一千餘戸ノ内約參百 / 六十戸ハ一瞬ニシテ全潰シ半潰大破セルモノ過半数ニ達ス即死者九名重軽（旧字体）傷者三十餘 / 名ヲ算シ凄絶慘絶全町遽然トシテ一大修羅場ヲ現出ス其慘状筆舌ノ能ク及ブ所ニアラ / ズ實ニ是レ関東地方ニ於ケル前古未曾有ノ大震災ナリ而モ餘震ハ大小強弱頻々トシテ / 連続シ各自其居ニ安ズルコト能ハズ戦々兢々トシテ屋外ニ避難スルコト數晝夜ニ及 / ベリ / 當神明社拝殿モ亦此厄ニ遇フテ倒潰セリ本社ハ辛ウジテ全潰ヲ免レタルモ大破セシニ / ヨリ直ニ應急修理ヲ加ヘ尚拝殿ノ建立ヲ策シタルモ如何セン當町内ハ被害激甚ヲ極メ / タルヲ以テ財力之ニ伴ナハズ故ニ先ヅ

敬神崇祖ノ大義ニ基ヅキ拝殿新築奉賛會ヲ組織／シ五箇年計畫（異体字）ノ方策ヲ樹シテ毎月會員ノ醵金ヲ蓄積シテ茲ニ金參千四百八拾圓七拾錢特／志寄附金參百壹圓六拾七錢其他町内積立金等ヲ以テ昭和三年七月エヲ起シ全年十一月／完成ス而シテ拜殿新築費金參千七百五拾貳圓八拾八錢記念碑建設費金四百三拾七圓貳／拾八錢ヲ費セリ／時偶千歳一遇ノ□御大典奉祝ニ際シ町内ノ民衆一同神前ニ參拜シ木ノ香床シキ新拜殿／ノ壯觀ヲ仰グコトヲ得タルハ是レ即チ神明懿徳ノ然ラシムル所ニシテ一ハ好箇ノ記念／トナリーハ其光榮ヲ慶ブモノナリ聊カ梗概ヲ記シ以テ後昆ニ傳フ／昭和四年四月二十一日建 一色賢山敬書

この碑文を解読してみると、以下のように要約できます。

最初の3行には、1923年が春先から平年に比べてやや気温が高かったこと、地震が発生した9月1日は未明から南寄りの風と雨が強かったことが記されている。当日の天気図（中央气象台（1924））を見ると、日本海に台風があり、このことから関東平野には南風が吹きやすい気象条件であったと推測できる。

3行目の終わりから、地震による揺れを感じた時刻が記されているが、「十一時五十八分」の「八」の字は、「七」と彫った後から彫りなおされていた。旧幸手町では大きな揺れによって、1000軒余りの家屋のうち約360件が一瞬のうちに全壊し、過半数の家屋が半壊したことが読み取れる。9名が（建物の倒壊によって）即死し、30余が重軽傷を負い、言葉では言い表し難い惨状であった。昼夜を問わず大小の余震が頻発し、安心して屋内に居られなかった。

碑文の後半は、神明神社の被害と復旧について、克明に記されている。拝殿は倒壊してしまい、本殿は全壊を免れたものの大破してしまった。本殿の応急修理をして、拝殿の新築を望むが、町内の被害が甚大であるため、再建のための資金を得ることは容易ではなかった。そこで、5年計画で再建を目指して、寄附を募った結果、1928（昭和3）年7月に着工し、その年のうち（11月）に完成した。その喜びの大きさと震災の記録を後世に残そうという強い意志が伝わってくる。

今後も文献調査や現地調査を繰り返し根気よく続け、幸手市内に残る関東大震災に関する記録を網羅的にまとめ考察をして、先人からのメッセージを後世に伝えられるよう、日々努力をしていきます。

中学2年 篠田海遥・野間鉄心
高校顧問 荒井賢一